

2025 年 11 月 23 日 降誕前節第 5 主日礼拝メッセージ

「人は外見を見るが、神は内面を見る」

牛田匡牧師

聖書 サムエル記 上 16 章 1-13 節

今回のお話は、イエス様が生まれるおよそ 1000 年ほど前のお話でした。神によって古代イスラエル民族の最初の王とされたサウルが、神によって退位させられ、その後継者を探しに預言者サムエルが旅に出かけたというお話です。サウルという人は、体も大きく(サムエル上 9:2)、勇敢な戦士であったそうです。そのため彼は古代イスラエルの民に対して次々に攻撃をしかけて来る周辺の異民族を次々と撃退し、古代イスラエル王国を確立するために最初の王として任命されました(9~14 章)。しかし、彼はその後、神の命令に背きます。と言うのも、アマレク人との戦いにおいて、「アマレクに属するものはすべて滅ぼし尽くしなさい。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも打ち殺しなさい。」(15:3)というのが神の命令であったにもかかわらず、アマレク人の王「アガグと、初子でない羊と牛の最も良いもの、それに小羊など、良いものはすべて惜しくなり、滅ぼさないで」(15:9)、生け捕りにして、自分たちの戦利品として持ち帰ってしまったためでした。もちろん、全ての命の創造者である神が、一つの民族を「男も女も、子どもも乳飲み子も、すべて滅ぼし尽くしなさい」という命令を、本当にされたのかどうか、という点については現代を生きる我々からすると、大きな疑問です。このようなお話を私たちはどのように読み取り、受け取るのかということは、未だ聖書から問われているということだと思います。とは言え、この『サムエル記』を記した執筆者たち(紀元前 6 世紀にユダ王国が滅亡した後の「バビロン捕囚」期の「申命記史家」たち)は、「サウル王は神の命令に背いたが故に王位から退けられた」という理解の上に、この歴史物語を執筆しました。

さて、そのサウル王の後に立てられたのが、西欧の絵画や彫刻などの芸術作品にも多く採り上げられているダビデでした。羊飼いの少年が武装した巨人のような戦士を小石一つで見事に撃退する「ダビデとゴリアト」(17 章)など、子ども向けの紙芝居や絵本にも多く描かれている人気の人物です。今回の 16 章は、そのダビデが見出される場面でした。預言者サムエルが神の命令に従って、ベツレヘムのエッサイの所を訪ねます。もう来月にはクリスマスがやってきますが、イエス様がこのベツレヘムにお生まれになったとされているのも、ここがダビデ王の出身の町だったからです(マタイ 2:5-6)。エッサイはサムエルに言われた通り、息子た

ちと共に身を清めていけにえ(ザバハ・屠り)の儀式の席に着きました。

続けて、サムエルの前には 7 人の息子たちが順番に連れて来られたと書かれています。長男のエリアブを見た時、サムエルは「彼こそ主の前に油を注がれる者だ」(16:6)と思いました。何故ならば彼はエッサイの家督を継ぐ長子であり、そして体も大きかったのでしょう。ヘブライ語聖書の価値観では、体が大きく腕力が強く、敵との戦いに勝利することは即、神様から祝福されていることであり、また子どもが沢山いて、家畜や家来が沢山いること、財産が沢山あることが即、神様から祝福されていることだと理解されていたので、まさにエリアブは、預言者の目から見ても次の王様になるに相応しいと感じられる人だったのだと思います。しかし、神はサムエルに言われました。「容姿や背丈に捕らわれてはならない。私は彼を退ける。私は人が見るようには見ないからだ。人は目に映るところを見るが、私は心を見る」(16:7)。

そして神はその後に続いた 6 人の兄弟も退けた後で、まだ家の外の野にあって羊の番をしていた 8 番目の末っ子ダビデを呼びに行かせ、そして彼を選ばれました。しかし、彼は当初から「いけにえの儀式」とその後の会食の席に一緒に着く人数には数えられていませんでしたし、家を離れた野で召使たちが行う仕事である羊の番をしていたような存在でした。つまり、エッサイの一族としてはまだまだ一人前ではない「若造」に過ぎないと思われていたというわけです。そのような彼が、まさか選ばれるなんて、人間の目から見ればあり得ない……。そのように見なされていたダビデが、神によって次の王として選ばれ、そしてサムエルによって兄弟たちの真ん中で油を注がれました(サム上 16:13)。そこには人間の価値観とは異なる、神の価値観の不思議があります。7 節にある神の言葉「人は目に映るところを見るが、私は心を見る」は、他の翻訳では「人は外観を見るが、主は心を見る」(新改訳・岩波訳・フランシスコ会訳)です。この言葉だけを聞くと、「なるほどそうか。神様はさすがだ」と納得しそうです。ですが、8 番目に預言者サムエルの前に連れて来られたダビデも、その外見について「彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった」(12)とも書かれていますので、やっぱり心・内面だけではなくて、外見も大事なのか、とも思ってしまいます。だとするとこの 7 節の言葉は「人は外見だけを見るが、神は加えて内面をも見る」という意味になるのでしょうか。ともあれ「神は人が見るようには見ない」(6)ということなのでしょう。

さて、現代社会で暮らしている私たちはどうでしょうか。一緒に暮らしている家族や、日頃から親しく付き合っている友人たちの間では、「外見や見た目より、性格

や内面の方が大事」というのは、当たり前かもしれませんが、その一方では初対面の相手に対しては、嘘か本当か「人は見た目が 9 割」などと言われたりもしています。それこそ初めて会って、少し会話を交わした程度では、相手が何を考えているか、どんな性格なのかを理解するのはとても難しいことです。ですから、選挙や就職活動の際に、時に「学歴詐称」や「経歴詐称」が行われるというのも、自分を相手に少しでも良く見せよう、信頼を得ようという魂胆から出ていることなのではないかと思います。

しかし、その人の本当の性格、本性が現れるのは、普段の平時ではなくて、何か一大事が起きた時なのではないでしょうか。それこそ「普段は、偉そうなことを言っているのに、いざとなったら全然頼りにならない」とか、「自分の事しか考えていないことが明らかになった」とか、そんな言葉が聞こえてきそうです。その一方で、また人間という存在の持つ真の美しさ、例えば持っているものを惜しまずに人と分かち合うことや、自分の大切なものを人に譲ること、それはモノだったり、お金だったり、時間だったり、そして時には命だったりもするわけですが、そのような美しく尊い姿が示されるのも、やはり日常生活の中よりも、非日常的な場面においての方が多いのではないかと思います。

聖書が示す神は決して外見の美しい神ではありませんでした。「イザヤ書」53章には「苦難を受ける主のしもべ」についての預言が、次のように記されています。

² 彼には見るべき麗しさも輝きもなく
望ましい容姿もない。

³ 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ
痛みの人で、病を知っていた。
人々から顔を背けられるほど軽蔑され
私たちも彼を尊ばなかった。

⁴ 彼が担ったのは私たちの病
彼が負ったのは私たちの痛みであった。
しかし、私たちは思っていた。
彼は病に冒され、神に打たれて
苦しめられたのだと。

⁵ 彼は私たちの背きのために刺し貫かれ
私たちの過ちのために打ち碎かれた。
彼が受けた懲らしめによって

私たちに平安が与えられ

彼が受けた打ち傷によって私たちは癒やされた。

キリスト教では、この「苦難のしもべ」を後代のイエス・キリストとして理解し、その十字架という受難を通して「神からの真の愛が示された」と、このイザヤの預言を通して理解しました。もちろん、絵画や彫刻、教会建築などの芸術作品としては、苦しく、痛々しくも、それでも崇高で美しい作品として仕上げられているわけですが、歴史的にはローマ帝国支配下における最悪の処刑方法である十字架刑によって処刑され、「人々から見捨てられ、顔を背けられるほどに軽蔑されていた程に、見るべき麗しさも輝きも、望ましい容姿もなかった」。そのような人が、神から遣わされた救い主、イエス・キリストだったというわけです。

11月も下旬となり、夕方、暗くなる時間も早まってきました。12月の冬至に向けて夜の時間がどんどん長くなっていきます。その一方で、町の中には至る所にクリスマスツリーが立ち並び、鮮やかな電飾が飾り付けられて、華やかなクリスマスセールが開催されています。教会でも来週からはいよいよイエス様の降誕（クリスマス）を待ち望む「待降節（アドヴェント）」です。夜空が暗いほど、小さく輝く星の明かりが見えるように、苦難の中にあっても決して無くなることのない神様の存在を覚えていたいと思います。「人は外見を見るが、神は内面を見る」と言われる神と共にあって、支えられ励まされながら、私たちは今日もここから、イエス・キリストの言葉と振る舞いに従った歩みへと導かれていきます。